

タイトル『せいしゅんのおわり』

千葉 雄太

登場人物

- ・松山英輔 (33) ……ホテルのフロント課員、夜勤
- ・松山真希 (23) ……英輔の妻、キャバクラで働いている
- ・松山隼人 (3) ……英輔と真希の息子
- ・川原幸一 (35) ……自動車教習所の教官
- ・朝倉香 (22) ……川原の恋人、大学4年生
- ・青井涼太 (22) ……香の浮気相手、大学4年生
- ・木村 (40) ……川原の教官仲間
- ・塚本詩穂 (27) ……教習所の事務員
- ・中村 (24) ……英輔の職場の後輩
- ・松山光子 (61) ……英輔の母
- ・宮田 (38) ……総合病院の医師

本文

○ 信号待ちをしている車の中で、キスをしている男と女(昼)

キスを終えた男女は見つめ合う。
運転席に座っている女(松山真希23歳)はハンドルを握ったまま、熱に浮かされた顔をしている。
助手席に座っている男(川原幸一35歳)が笑顔で真希に言う。

「……青」

真希「……?」

川原「信号、青ですよ」

真希「あ」

真希、慌てて前方を確認し、アクセルを踏む。

○ 道の上、動き出す車

車体には『江東自動車学校』とペイントされている。

①『真希と川原』

○ 江東自動車学校・敷地内

『江東自動車学校』とペイントされた車が、何台も停まっている。

○ その中の一台・車内

授業終了を知らせるチャイムが鳴っている。

る。

教習を終えた真希がベルトを外す。

川原は真希の名簿に点数を書き込む。

真希「(川原に名刺を渡し)私、ここで働いてる」

川原「(名刺を見て怪訝な顔)」

真希「キャバクラ」

川原、吹き出す。

真希「……何? 嫌い?」

川原「いや、すいません。キャバクラですか」

真希「旦那の給料だけじゃ、やってけないの(膨れる)」

川原「大変ですね」

真希「30にもなつて貯金が全然ない男だったの」

川原「……僕もです」

真希「彼女のために、貯金ぐらいしてた方がいいと思う」

川原「(笑って)僕は結婚願望ないですから」

真希「いるんでしょ、彼女」

川原「……」

真希「私だって結婚願望なんて無かったけど、出来ちゃったんだもん」

川原「子供、いるんですか?」

真希「今3歳」

川原「へえ、そうは見えないですね」

真希「それ、褒めてるの?」

川原「はい。そのつもりです」

真希「ねえ、敬語やめて。何か気持ち悪い」

川原「規則なんですよ。生徒さんには敬語使えって」

真希「車の中は2人つきりなんだからイイじゃん」

川原「そうですけど……(腕時計を見て時間を気にする)」

真希「あ、ごめん。帰るね」

川原「じゃあ、また(採点した名簿を笑顔で渡す)」

真希「(笑顔で)バイバイ。お店来てね」

真希、車から出て行く。

○ アパートの一室・松山家(昼)

2DKの部屋。

「ただいま」

と玄関ドアを開け、真希が入って来る。

「ママあ!」

と息子の松山隼人(3)が真希に走り寄って来る。

真希「ただいま隼人……ちゃんとお留守番してた?」

隼人「パパとアンパンマン見てた！」
真希「そう。ちゃんとお利口さんしてたんだ」
真希、隼人の頭を撫でる。

寢室のテレビの前で寝転んで携帯電話をいじっていた夫の松山英輔（33）が「おかえり」

と素っ気なく言う。

真希「（無視して）隼人のほっぺも、アンパンマンみたい」

隼人「違う！ 食パンマンがいいの！」

真希「だって、プクプクしてて、おいしそう」

真希、ふざけて隼人のほっぺに齧り付く真似をする。

隼人「（嫌がり）僕、食パンマン！」

○ 江東自動車学校・教官事務所（夕方）

喫煙スペースで煙草を吸っていた川原の尻を、同僚の木村（40）が叩く。

木村「さっきの若い子、イイ感じじゃないの」

川原「夫と子供がいるそうです」

木村「意外だね」

川原「先輩にお譲りしますよ」

木村「俺、若い子ダメ」

川原「若い上に所帯持ちです」

木村「面倒臭い。よくやるねお前も。オジサンはそういうの、もう疲れちゃって無理」

木村、大袈裟に煙草の煙を吐き出して嫌らしく笑む。

○ 松山家・DK（夕方）

隼人が泣いている。

英輔「おばあちゃん家でもアンパンマン見られるから」

隼人「やだよだ！ オウチがいいの！」

真希「隼人……ママもパパも今日の夜はお仕事なの。お利口さんだから、言うこと聞いて」

隼人「やだあ！」
隼人、真希に抱き付く。

真希「もう、今日はどうしたの。甘えん坊」
隼人「ママと一緒にがいい」

真希「……（さすがに胸に堪える）」

英輔「（真希に）俺、もう出なくちゃ間に合わないよ」

真希「もうパパお仕事の時間だって……ね、パパとブーブでおばあちゃん家行ってね」

（英輔に合図を送る）

英輔「よし、行くぞ隼人」

英輔、真希から隼人を強引に引き離し、抱っこする。

隼人「やだ、やだ！ ママあ！ ママあ！」
英輔「じゃ、行って来る……隼人、ブーブ乗るよブーブ。おばあちゃん待つてるよ」

激しく泣く隼人を抱っこしたまま、玄関ドアを開けて出て行く英輔。
部屋に独りになった真希、堪らなくなつてテーブルに顔を埋める。

○ キヤバクラ『クレア』の前（夜）

雑居ビルの前にキヤバクラ『クレア』の看板が立っている。

客引きの男が、手当たり次第に通行人の男性に声をかける。

○ 同・店内

薄暗い店内。

化粧をしてドレスアップした真希が店員Aに先導されて客のテーブルへとやって来る。

「お待たせしました！ 御指名のマヤさんです」

と店員Aはキヤバ嬢真希の源氏名を呼んで客に引き合わせる。

真希「！（客の顔を見て驚く）」

川原「（含み笑いをして）ども」

真希を指名した客は川原だった。

真希「（満面の笑みで）来てくれたんだ！ 嬉しい！」

× × ×

数十分後。

酒が入り、川原と真希は良いムードである。

川原「マヤさん、お酒強いね」

真希「先生こそ。私、顔が熱くなってきちゃった」

川原「先生なんて呼ばなくていいよ」

真希「えー、じゃあ何て呼ぶの？」

川原「……川原さん、とか」

真希「やだ。先生は先生って呼ぶ方が合ってる」

川原「（苦笑い）変な風に誤解されるだろ」

真希「先生、私の名前覚えてる？」

川原「……マヤ……」

真希「それは源氏名……私の名前、覚えてないでしょ。いつも名簿見てるくせに」

川原「生徒、いっぱいいるから」

真希「サイテー……真希だよ」

川原「真希か」

真希「名前知らない相手でも、キスするんだ」

川原「誰にでもするわけじゃないよ」

真希「(疑うような目で) どうだろう」
川原「(笑って) 俺、そんな軽そうに見える?」
真希「見える」
川原「(大袈裟に笑う)」
川原のケータイがポケットでバイブする。
川原、ケータイを取り出す。
『着信 香』と液晶画面に表示されている。
川原、電話に出ない。
真希「(液晶画面を覗き見て) 彼女?」
川原「……(携帯を仕舞う)」
真希「カオリっていうんだ、名前……出ないの?」
川原「出られないでしょ、ここじゃ」
真希「そっか。結構うるさい人なの?」
川原「あとでメールすれば大丈夫」
真希「いくつ?」
川原「……22」
真希「若っ! 私と変わらない!……どれぐらい付き合ってるの?」
川原「3年ぐらい」
真希「3年……てことは19の時から付き合ってたんだ! ロリコンなんだ、先生」
川原「(笑って) 違うよ、たまたま」
真希「あー、今いやらしい顔した」
川原「してないって」
川原、誤魔化すように水割りを呷る。
真希「ねえ、明日休み?」
川原「休みじゃなきゃ、こんなに飲めない」
真希「じゃあ、お店上がった後、飲みに行かない? 私、今日12時で上がりだから」
川原「(腕時計を見る) 12時……」
真希「1時間ぐらい、下の居酒屋で飲んで待って……ダメ?」
川原「12時から飲んで、俺、きつとすぐ寝ちゃう」
真希「(悪戯っぽく笑んで) 寝かさない」
川原「大丈夫なの? 家」
真希「うん。今日は旦那は夜勤で出てるし、子供も親の所に預けてるから」
川原「ホントに大丈夫?」
真希「全然平気。私だってたまにはストレス発散したい」
川原「旦那さん、心配しない?」
真希「朝の9時までに帰ればバレないもん」
川原「俺、やだよ。変な風にモメるの」
真希「度胸ないなあ。男でしょ」
川原「いや、面倒なことになるのは、ホント嫌だよ」
真希「大丈夫だって。保証する。もし旦那に

何か言われても、先生のごことは絶対言わないし」
川原「……」
真希「このままバイバイするの、つまらないでしょ」
川原「……じゃあ、飲もうか」
真希「うん! 飲もう飲もう」
真希、川原の腕にすがり付き、甘える。
○ファミレス・店内(早朝)
窓の外は、すでに明るくなっている。
テーブル席で、ベッタリ身を寄せ合って座っている真希と川原。
2人共、眠たそうだ。
川原「……そろそろ、帰ろうか」
真希「今何時?」
川原「もうすぐ6時」
真希「眠い……」
真希、川原の肩に頭を預け、眠いしぐさ。
川原「帰ろうよ。俺、夕方から予定あるし」
真希「……彼女?」
川原「……」
真希「バカ(川原の腕をつねる)」
川原「痛っ」
真希「ホテル行けば良かったね」
川原「……」
真希と川原、キスをする。
真希のケータイが鳴る。
真希「(ケータイ無視して) ねえ、もうちょっと一緒にいて」
○松山家(昼)
玄関のドアを開け、真希が入って来る。
酒と眠気で、フラフラしている。
「ママお帰りい!」
と隼人が飛んで来る。
真希「(隼人を抱っこして) 隼人お。ただいまあ〜」
隼人「……ママ、くさあ〜い」
英輔が玄関まで来て
「こんな時間までどこ行ってたんだよ! 電話も出ないで!」
と怒鳴る。
真希「(隼人を下ろし) お客とアフター行ってきた」
英輔「こんな時間までやってる店ないだろ」
真希「ファミレス」
英輔「アフターなんて、する必要あんのかよ」
真希「……っせえなあイチイチ……アフターだって仕事のうちだから」

英輔「店からアフターやれって言われてんのかよ」

真希「それぐらいしないと指名取れないから……仕事なんだって」

英輔「子供放っておいて朝まで男と酒飲んで、何が仕事だよ」

真希「アンタの稼ぎが悪いから私が働いてやっつてんだろーが！」

英輔「別に夜の仕事やってくれなんて頼んでないだろー！」

真希「あーもういい！ 隼人が見てるから……寝る」

真希、寝室へ行き、横になる。

英輔「それでも母親かよ！」

真希「(無視)」

隼人は黙って夫婦喧嘩を見ている。

○ 映画館(夕方)

恋愛物の洋画が上映されている。

川原が恋人の朝倉香(22)と映画を観ている。

が、川原は完全に睡魔に負けて熟睡している。

香、隣で熟睡している川原のことを睨む。

○ 洋食レストラン(夜)

テーブル席で向かい合って食事をしている川原と香。

香「幸ちゃん、飲まないの？ お酒」

川原「ん？ ああ……明日仕事だから」

川原はソフトドリンクを飲んでる。

香「いつも飲むじゃん」

川原「……今日はいい」

香「会った時、お酒臭かった……映画館でも臭かったよ」

川原「(少し不機嫌になる) まあ、昨日結構飲んだから」

香「何時まで飲んでたの？」

川原「終電ぐらいかな」

香「電話も出なかったし、メールもくれなかったね」

川原「だいぶ酔ってたから」

香「酔ってても、いつも寝る前にメールくれるよね。昨日は香のこと忘れるぐらい楽しかったんだ？」

川原「そういうわけじゃないけど、酔って家帰ってそのまま寝た」

香「ふーん……何かあったんじゃないかって心配した」

川原「そう。ごめん」

香「同じこと香がしたら、心配しない？」

川原「……」

香「心配しないか。香だけだね、心配するの」

川原「だから、ごめんって」

香「イライラしてるね」

川原「してないよ」

香「顔に出てるよ」

川原「してないって」

香「3年も付き合ってたなら、彼氏さんがイライラしてるかどうかがくらい分かる」

川原「そうやって突っかかってこられたら誰だってイライラするよ！ こっちは仕事してんだから、飲みたい時ぐらいあるよ」

香「香は学生だから、どうせ分らないだろうって？」

川原「そんなこと言っていないだろ……ただ、もうちょっと気遣ってくれてもいいんじゃないかって言ってるんだよ」

香「香には気遣ってくれてるの？ 香の気持ちはどうでもいいの？ 香だって今苦しんだよ、就活とか卒論とか……どうせ幸ちゃんは香のこと上から見て馬鹿にしてるんだよ」

川原「(溜息をつく)……そんなことないよ」

香「もうメールも電話もしなくていい」

川原「ごめんって言ってるだろ。昨日のことは反省してる。悪かった」

香「もういい。いつもそうじゃん。喧嘩になつて、幸ちゃんが謝って。謝ってるだけで、香のことちゃんと考えてくれてない」

川原「(舌打ち) 考えてやってるから謝ってるんだろ」

香「何それ。考えてやってるって。すごく自分勝手。幸ちゃんのお嫁さんになる人は、我慢強い人じゃないと無理だね」

川原「……もういいよ」

香「(睨む)」

川原「もういい」

香「何がもういいの」

川原「もういい。面倒臭い」

香「本音が出たね。香と別れたいんだ」

川原「別れたくないよ……でも、そういう態度、もううんざりだから」

香「悪いのは香なんだ？」

川原「……」

香「香のこと、もう好きじゃないんだ？」

川原「(舌打ち)」

香「ヒドイ」

川原「おい、香！」
香、店から出て行く。

○ 洋食レストランの前

店から出た香を追う川原。
川原「香、待てよ、おい」
香「来ないで……」
川原「ちゃんと話しよう」
香「嫌」

香は早歩きで歩いて行く。
やがて横断歩道にさしかかり、香は止まる。

信号が赤だ。

川原「昨日のこと、本当に悪かったと思ってる。ごめん」

香「涙目でキッと前方を見据えている」

川原「香は、俺と別れたいの？」

香「(首を振る)」

川原「じゃあ……仲直りしよう」

香「……」

川原「なあ、香」

香「幸ちゃんは、本当に香のこと好き？」

川原「……好きだよ」

香「香は……分からなくなった。幸ちゃんのこと、本当に好きか……」

川原「……」
信号が青になる。

香は歩き出す。

川原、もう香を追わない。

○ 車道(昼)

『江東自動車学校』とペイントされた車がノロノロと走っている。

○ その車の中

運転している真希と、助手席に座る川原。

真希「どうしたの？ 何か元氣ない」

川原「そう？」

真希「彼女と何かあった？」

川原、笑う。

真希「何？ 気持ち悪い」

川原「いや、勘が鋭いなと思って」

真希「……喧嘩したの？」

川原「距離置こうってなった。しばらくメールも電話もナシだった」

真希「……」

川原「おい！ 停めて！」

真希、危うく前方の黄信号を見逃しそうになった。

○ 松山家・風呂場(夜)

真希、湯船に浸かりながらもケータイをいじっている。

防水のため、ケータイを持つ手を透明のビニール袋で包んでいる。

○ 同・寝室

英輔と隼人がテレビを見ている。

真希が風呂から上がる。

英輔「風呂にまでケータイ持ってってんのかよ」

真希「お客からのメールとか、色々あるの……ちよっと電話してくる」

真希、ケータイ持ったまま、玄関から外へ出る。

英輔「聞かれちゃまずい話でもあんのかよ」

英輔、と言いつつ自分も携帯電話をいじり始める。

○ 同・アパートの外廊下

部屋から外に出た真希、ケータイで電話をしている。

真希「やっぱり先生の声聞くと安心する」

川原と話しているようだ。

○ 江東自動車学校・教室(昼)

学科の授業が行われている。

生徒の真希、教壇に立つ川原に熱い視線を送っている。

○ 同・教室前の廊下

同僚の木村、やって来て授業を終えた川原に缶コーヒーを渡す。

木村「ほい。オゴリ」

川原「あ……すいません、どうも」

木村「どうよ、あの若奥さんとは」

川原「何もありませんよ」

木村「ホントか？ 女の方はだいぶお前に惚れてるみたいじゃない」

川原「そうですかねえ……」

木村「ほどほどにしとけよ」

川原(笑って)木村さんに言われたくないですよ。聞きましたよ、最近のおウワサ」

木村「(含み笑い)」

川原「あんまり悪さばかりしていると、痛い目見ますよ」

木村「お互い、気をつけないとな」

木村、嫌らしい笑みを浮かべて川原の股間をポンと叩く。

木村「真希が近付いて来たのを見て」……じ

や、またな」
木村、去って行く。

真希「おはよ」
川原「あんなに見られてちや、授業やり辛いよ(苦笑する)」

○ キヤバクラ『クレア』・店内(夜)

川原「もういいよ。明日も出勤だから、そんなに飲めない」

真希「じゃ、これ最後」

真希、水割りに氷と水を入れ、マドラーで混ぜて川原に渡す。

真希「ねえ、飲まなくていいから、朝まで一緒にいて」

真希、川原の手を握る。

真希「好き……」

真希、川原の身体に身を寄せる。

○ ラブホテルの一室(朝)

真希と川原が裸で寝そべっている。

真希の枕元で、ケータイが鳴る。

ケータイの液晶画面に『着信 旦那』と表示されている。

真希、電話に出る。

真希「面倒くさ(そうに)何……ああ、もうそんな時間なんだ……お店で酔い潰れて寝ちゃった……しょうがないじゃん、仕事なんだから……はいはい……もういい、うるさいよ」

真希、電話を切る。

川原がムクツと身を起こす。

真希「あ、ごめん。起こしちゃった？」

川原「旦那さん？」

真希「そうだけど……大丈夫。絶対に気付かれてない」

川原「今何時？」

真希「7時」

川原「……今日はこのまま出勤だな」

真希「ごめんね。無理させちゃって」

川原「いいよ……シャワー浴びてくる」

川原、裸のままベッドから出る。

真希「私も起きる……起こして」

真希、寝たまま川原に手を伸ばす。

川原、真希の手を引っ張り、起こす。

裸の2人、身体をくっつけ合う。

真希「幸せ……」

真希、川原の胸に顔を埋める。

○ ラブホテルのエレベーター

部屋を出た真希と川原がエレベーターに乗り込む。

エレベーターのドアが閉まる。

1階のボタンを押す川原。

下降を始めるエレベーター。

川原「明日、久しぶりに彼女と会う……別れ話になるかも」

真希「……別れたら、私のせい？」

川原「(微笑)いや、自分のせいでしょう」

真希「別れなくていいよ。こうやって一緒にいられる時間があるなら、私、それだけで満足するから……」

やがて、ドアが開く。

○ 松山家(昼)

玄関を開けて帰宅した真希に、いつもの

ように隼人が抱き付いてくる。

隼人「ママあ！」

英輔「(寝室から出て来て)お前、いい加減にしろよ！ 何時だと思ってるんだよ！」

隼人、怯えた表情で真希にすがり付く。

英輔「なんでこんな時間になったんだよ！」

真希「だから、お店で寝ちゃって」

英輔「浮気してんじやねえのかよ。こんな時間まで帰って来ないなんてオカシイだろ」

真希「馬鹿じゃないの……」

英輔「なんか隠してんだろ、おい！」

隼人、泣き出す。

真希「やめて……おっきい声出さないで。(隼人に)隼人、大丈夫だからね。ママと向こう行こ」

真希、泣き出した隼人を抱っこして寝室へと向かう。

英輔「都合のいい時だけ母親の顔すんなよ」

真希、無視して寝室へと入る。

○ 江東自動車学校・敷地内(昼)

川原が欠伸をしながら自分の教習車を洗車している。

木村が30代半ばの女性の生徒と親しく話しながら教習車に乗り込んでいくのが見える。

川原、ほのぼのと笑む。

○ 松山家・寝室(夕方)

寝室のスペースで、ゴムボールでキャッチボールをしている英輔と隼人。

英輔、真希のケータイが床に置かれたままになっていることに気付く。

キャッチボールを中断し、真希のケータイ

イを手取る英輔。

隼人「あ、それママの……」

英輔「(シーツのポーズ)」

英輔、通話履歴を調べるが、全て消去されている。

英輔「……」

トイレの水洗音が聞こえてくる。

英輔、真希のケータイを慌てて元あった場所に返し、隼人とのキャッチボールを再開する。

トイレから出て来た真希が寝室に入ってくる。

真希「今日、お店でミーティングがあるみたいだから早目に出る」

真希、床のケータイを手取る。

横目でケータイを見ていた英輔、ゴムボールを捕球し損なう。

隼人「パパ、へた〜」

○ 自転車で疾走する真希(夕方)

真希、『江東自動車学校』を指して自転車を飛ばしている。

雨が降ってくる。

夕立ちの中、雨に濡れながら真希は一心不乱にペダルを漕ぐ。

○ 江東自動車学校・教室前の廊下

川原と木村が立ち話をしている。

木村「……(話を中断し) おい」

川原「？」

木村「……(前方に顔を向けたまま固まっている)」

川原、木村の目線を追うと、そこには雨でびしょ濡れになった真希が立っていた。

川原「(少し、ゾツとする)」

木村「(引きつった笑みを浮かべ) じゃ」

木村、その場から去る。

真希が雨水を滴らせながら川原に近寄る。

川原「……何？」

真希「仕事の前に、会いたかったから……ミーンティングだって嘘付いて来た」

川原「……」

真希「ねえ……やっぱ別れて、彼女と。別れなくてもいいなんて言ったけど、やっぱり別れて」

川原「……(周りを気にする)」

真希「お願い」

川原「ああ」

真希「絶対、別れてね」

川原「……分かった」

真希「ありがと(笑む)」

雨に濡れて佇む真希は、幽霊のように不気味だ。

川原「じゃあ、俺、授業あるから……またメールする」

真希「うん。ごめんね、急に来ちゃって」

川原「いや……じゃあ」

川原、逃げるように教官事務所へと入って行く。

真希、その場にポツンと佇む――。

○ ファミレス・店内(翌日・夜)

テーブル席で向かい合って座っている川原と香。

川原「じゃあ……もう少し、このままの状態

でいようか」

香「うん……」

2人、しばしの沈黙。

香「この2週間、辛かった……3年間、おはようとおやすみのメールは必ずしてたから」

川原「俺も、何かあるとつい香にメールしちゃうになる。習慣化してるんだね」

香「情があるんだよ、お互い……メールだけは解禁しようか」

川原「そうだな(苦笑)……」

○ ファミレスの外

店を出て歩き出す川原と香。

川原「今日、このまま帰る？」

香「どっか行きたいの？」

川原「どうしようか……」

香「？」

川原「終電まで、あと2時間ぐらいあるから

……ホテルは？」

香「……」

川原「行こうよ」

香「(黙って頷く)」

○ キャバクラ『クレア』・店内(夜)

椅子に座って店員に呼ばれるのを待っている真希。

ケータイがバイブする。

真希、ケータイを見ると川原からメールが入っている。

『彼女と話し合ったけど、結局もう少し様子を見ようってことになった。俺自身、自分の気持ちに整理が付けられない。どっつかずの態度で苦しめちゃってゴメン』というメール文章。

真希「……(ジッとメール画面を睨む)」

○ 江東自動車学校・教室(昼)

真希を含めた10名程の生徒が教壇に立つ木村の話の聞いている。
木村「皆さんは今日、無事にこの江東自動車学校を卒業されました。各自これから学科試験を受け、その試験にパスすればどなたにも免許証が交付されます。しかし、それで安心してはいけません。自動車というのは人の命を奪う大変危険な乗り物です。いいですか、皆さん、くれぐれも自動車は危険だということを忘れることなく……」

○ 同・教室の外

自動車学校を卒業した生徒達がぞろぞろと教室から出て来る。
真希もその中の一人だ。
教室の前にいた川原と擦れ違う真希。
川原「おめでどう」
真希「(無視する)」
真希はそのまま出入り口へと向かう。
川原「……」

○ キヤバクラ『クレア』・店内(夜)

川原と真希が飲んでいる。
川原「(グラスの水割りを空け) おかわり」
真希「無理して飲まなくていいよ」
川原「いや、明日休みだから」
真希「彼女だって心配するんじゃない？」
川原「……嫌味？」
真希「そう」
川原「飲んで帰るってさつきメールした」
真希「そんなんで大丈夫なんだ」
川原「別にヨリ戻したわけじゃないし」
真希「でも、やっぱりメールとかはするんだ」
川原「一応……」
真希「(川原の水割りを作りながら)……ホントは私も分かるよ。別れられない感じ」
川原「情だっけ言ってた。彼女は」
真希「情か……私も子供は棄てられない」
川原「旦那さんは？」
真希「旦那？ どうでもいい……(川原に水割り渡して) はい、お待たせ」
川原「(水割りに口をつけ)中途半端でごめん」
真希「私も中途半端だもん。一緒」
川原「俺は中途半端で、卑怯だ」
真希「酔ってるね……珍しく顔赤い」
川原「昨日、あんまり寝てないから」
真希「彼女は会ってないの？ こないだ会

った時から」

川原「うん……」

真希「こないだ会った時、エッチしたの？」

川原「(笑う) 酔ってるね」

真希「酔ってない。したの？」

川原「するわけないだろ、そういう感じじゃなかったし」

真希「したくならなかったの？」

川原「ならないよ」

真希「ホント？」

川原「ホント」

真希「エッチしないでね。私以外の人と」

川原「(苦笑) はいはい」

真希「真面目に言ってるんですけど」

川原「……はい」

真希、川原を睨む。

○ ラブホテルの一室(深夜)

ベッドの上、コトを終えた真希と川原が裸で寝そべっている。
真希「(川原の胸を撫でながら) 今が楽しければ、一緒にいられる時間が幸せなら、それでいいんだよね……」
真希、自分に言い聞かせるように言う。

川原「……(天井を見つめる)」

真希「先生といると、子供のことも忘れそう」

真希、川原の胸に顔をくっつける。

真希「先生の心臓の音聞くと、何か安心する」

川原、真希の髪を優しく撫でる。

真希のケータイが枕元でバイブするが、

真希は無視をする。

○ 松山家(翌日・昼)

真希が帰宅する。

寝室に敷いた布団の上でスヤスヤ寝ている隼人が玄関から見える。

真希「隼人、まだ寝てるんだ……」

真希、玄関からDKを通り寝室へと入る。

英輔が隼人の隣で寝っ転がりながらケータイ画面を見ている。

真希「お客とアフターでファミレス行ってた」

英輔「ふーん……(まったく気のない素ぶり)で、携帯をいじる」

○ 江東試験場・前の道(日替わり・夕方)

江東試験場からホクホク顔で出て来る真希。
立ち止まり、財布から取りだての免許証を出し、写メールを撮る。
真希、引き続きケータイを操作し、免許

証の写真を『先生』宛てに送る。

○ 江東自動車学校・教官事務所（夕方）

「え？ クビ？」

喫煙スペースで煙草を吸っていた川原が驚く。

「……声が大きいです。昨日大変だったんですから」

と女性事務員の塚本詩穂（27）が答える。

川原「そんなにヤバかったの？」

詩穂「凄かったですよ。絶対殺されると思いましたがもん、木村さん」

川原「いや、俺も忠告してたんだよ、木村さんには。あんまりやり過ぎると痛い目見ますよって」

詩穂「（手で30センチぐらいの大きさを作り）こんなでしたよ、出刃包丁」

川原「……そりや怖いなあ」

詩穂「最初に包丁向けられたの私なんですから！ 木村って教官はいるか？ 世話になつてる大石純子の亭主だって」

川原「でも、まさか旦那が乗り込んで来るなんてな……（人差し指で頬をなぞり）こっち関係の人？」

詩穂「違うと思うけど、やっぱり奥さん奪われた亭主の怨みって怖いですよ」

川原「……」

詩穂「間一髪、木村さんが刺される前に何とか先生達で取り押さえたからいいけど……川原さん、出勤日じゃなくて良かったですねえ」

川原「そうだね……」

詩穂「木村さん、たぶんもうこのまま来ないんじゃないかって皆言ってます……異動かクビか……あれだけの騒ぎ起こしちゃったら、ちよつとねえ……」

川原「……」

詩穂「川原さんも気を付けた方がいいですよお」

川原「馬鹿……俺は大丈夫だよ……」

川原の吸っている煙草の灰、相当長くなつていて、ポトツと落ちた。

○ 車を運転している真希（日替わり・夜）

免許取りたての真希、ぎこちない運転。

○ コインパーキング（夜）

若葉マークが付いた車を、苦勞して何とか駐車させる真希。

エンジンを切り、真希が運転席から降りる。

外で見ていた川原は、浮かない顔をしている。

真希「（自慢げに）どう？ なかなかの腕前ですよ？」

川原「うん……」

真希「褒めてよ。先生の弟子なんだから」

真希、川原と腕を組み、歩き出す。

○ キャバクラ『クレア』・店内

真希と川原、飲んでいる。

川原は相変わらず浮かない表情。

真希「どうしたの？ 何かあった？」

川原「いや……別に」

真希「元氣ないじゃん」

川原「……そうかな」

川原、グイと水割りを呷る。

真希、川原のグラスに水と氷を足そうとする。

川原「あ、いい。ロックにして」

真希「飲みたいの？」

川原「うん……」

真希「変なの……」

真希、川原のグラスに焼酎を注ぐ。

川原は注がれた焼酎を再びグイと呷る。

真希「何か嫌なことでもあったの？」

川原「……」

真希「……私に言い辛いこともあるの？ 彼女と何かあったの？」

川原「……」

真希「ねえ！」

川原「……（ボソボソと喋り始める）俺、いい給料もらってるわけじゃないから、毎回毎回来れない……彼女とも……やり直そうかって思ってた……結婚とかもそろそろ考えなきゃならない歳だし……距離置いて、気付いたんだよ、アイツが必要だって……真希のことも好きだけど……旦那さんと子供から奪ってまで、真希のことを幸せに出来るとは思えないし……だから、やっぱりさあ、好きな気持ちはあるけど、我慢して今別れた方が、お互いの幸せの為に良いんじゃないかって……」

真希「え……何……」

川原「ごめん……」

真希「え？ どういうこと」

川原「だから、その……ごめん」

真希「ごめんって……もう会えないってことか。」

川原「……」
真希「え？ 何で？」

川原「何でって、だから……」

真希「やだよ、なに勝手に決めてんの！」

川原「ごめん」

真希「ごめんじゃないよ！ やだよ！」

川原「だから、しょうがないんだよ……お互いのために」

真希「私、旦那と別れるから」

川原「……」

真希「子供もいない」

川原「何言ってるんだよ」

真希「私、先生と別れたくない」

川原「俺は無理なんだよ！ そういうの……責任負えないんだよ……嫌なんだよ」

真希「だから私、先生が望むようにするから！」

川原「勘弁してくれ」

真希「……」

川原「本当に、ごめん」

真希「……私、私ね……」

川原「？」

真希「生理が、来てないの」

川原「(フツと笑い) 帰るよ」

川原、席を立つ。

真希「待って！ ほんとだよ！ ねえ！」

真希、川原の腕を掴む。

川原は助けを求めるような目で店員達を見る。

「お客様、お帰りでしょうか」と店員Aが寄って来る。

真希、仕方なく手を離す。

川原、そのまま出入り口の方へと店員Aに先導されて行く。

真希(去って行く川原の後ろ姿を茫然と見つめている)

店員B「マヤさん、4番テーブルまでお願いしますす！」

真希「……」

店員B「マヤさん！」

心ここにあらずの真希は店員Bの呼びかけにも気が付かない。

店員B「マヤさん！」

店員B「マヤさん！」

心ここにあらずの真希は店員Bの呼びかけにも気が付かない。

心ここにあらずの真希は店員Bの呼びかけにも気が付かない。

心ここにあらずの真希は店員Bの呼びかけにも気が付かない。

○ 繁華街にあるバー・外観

川原、ふらふらとした足取りでバーへと入って行く。

入って行く。

○ キヤバクラ『クレア』・店内

中年の男性客の接客をしている真希、仕事そっちのけで酒を呷っている。

中年の男性客の接客をしている真希、仕事そっちのけで酒を呷っている。

もう自棄である。
どどん飲む。

○ バー・店内

カウンター席で川原が一人で飲んでいる。

バーテンダー「何か良いことでもあったんですか？」

川原「？」

バーテンダー「次から次に注文されるので……いつもこれぐらい飲まれるんですか？」

川原「いや……今日は特別に……」

バーテンダー「笑って) やっぱり何か良いことあったんですね」

川原は自嘲気味に笑ってグラスの酒を呷る。

と、テーブルの上に置いていたケータイがバイブする。

『着信 香』と表示されている。

少し迷ってから川原は電話に出る。

川原「……もしもし」

店内には「蛍の光」が流れている。

店員B、

「ありがとうございますあ！」

と最後の客を出入り口で見送り、店内へと帰って来る。

と、店員Aがキョロキョロと店内を見回している。

店員B「ん？ どした？」

店員A「いや、マヤさんがいないなあと思っ

て……」

店員B「(店内のキヤバ嬢達を物色し) あ……そういうえば」

店員A「今日車で来ちゃったって自慢してたけど、まさかねえ」

店員B「相当飲んでたからなあ……まさか車で帰ったなんてことは、まさかねえ……」

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

店員AとB、顔を見合せて笑う。

英輔、青くなる。
隼人、不安になって泣き始める。

○ 渋谷駅周辺（2ヶ月前・昼）

多くの若者達が行き交っている。
その中に、香と青井涼太（22）もいる。
2人は楽しげに連れ添って歩いている。
①『香と青井』

○ 喫茶店

喫茶店でお茶している香と青井。
青井、顔を赤らめて大量の汗をかいている。
香 「青ちゃん、そんなに暑いのか？」

青井 「いや……まあ」

香 「すごい汗なんですけど」

青井 「そう？」

香 「鏡見る？」

香、バッグから手鏡を出して青井に渡す。

青井（手鏡に映った自分の顔見て）「ホントだ」

青井、ポケットティッシュで汗を拭う。

香 「（クスツと笑い）おじさんみたい」

青井（はにかみ）「うるさいなあ」

香 「香、青ちゃんとは仲良くなれないまま

卒業すると思ってた。こんな風に一緒に買

い物行くななんてこと、ないと思ってた」

青井 「……なんで？」

香 「だって青ちゃん、全然話してくれない

んだもん。嫌われてるのかと思ってた」

青井 「そんなことないよ」

香 「じゃあ何で話してくれなかったの？」

青井 「それは……なんとなく……」

香 「なんか、青ちゃん見てると楽しい」

青井 「……」

香 「青ちゃん、いい人だと思うんだけどな

あ。彼女さんがいないのが不思議。好きな

人とかいないの？」

青井 「ん……まあ」

香 「友達紹介しようか？」

青井 「いや、いい、そういうの気まずいし」

香 「……じゃあ、香みたいな子はどうか？」

青井 「え……どうって？」

香 「アリ？ ナシ？」

青井 「いや、それは……（また汗をかく）」

香 「あー、ナシって思ってるんでしょ」

青井 「いや、そうじゃなくて……」

香 「無理しなくていいよ。青ちゃんにフラ

れても香には彼氏さんがいますから」

青井 「……」

香 「また買い物付き合っつね。今度、御飯

も食べに行こ」

青井 「大丈夫なの？ その、彼氏とか」

香 「うん。ちゃんと報告すれば平気。束縛

しないヒトだし」

青井 「そっか……」

香 「香、もんじゃ食べに行きたい。あー焼

肉にも行きたいなあ……お寿司もいいなあ

……」

○ 香の実家・香の部屋（夜）

香、ベッドに寝つ転がりながらケータイ

をいじっている。

『幸ちゃん』宛に電話をかける。

が、何回コールしても『幸ちゃん』こと

川原幸一は出ない。

香 「うざ……」

香、電話を諦め、続いてカチャカチャと

メールを打ち始める。

○ ビジネスホテル・フロント（夜）

英輔と同僚の中村（24）がフロントに

立ち、接客をしている。

「どうもありがとうございます」

と客に部屋のキーを渡し、お辞儀をする

英輔。

客がはけた途端、英輔はポケットからケ

ータイを取り出してメールをチェックす

る。

中村 「奥さんにメールっすか？」

英輔 「いや、ちよっと」

中村 「なんすかあ、ちよっとって」

英輔の持つケータイの液晶画面には、『カ

オリさんからメールが届いています』と

表示が出ている。

英輔、ニンマリする。

英輔 「最近、ミクシイで知り合った女子大生

とメル友になった」

中村 「マジっすかあ！ 熱いっすねえ」

英輔、客に見られないよう周囲を気にし

ながら、メールを打つ。

○ 香の実家・香の部屋

相変わらずベッドに寝つ転がってケータイ

イを見ている香。

と、ケータイがバイブする。

液晶画面に『エースケさんからメールが

届きました』と表示される。

○ ビジネスホテル・フロント

フロントに立ちながらケータイ画面を操

作している英輔。

中村「まじ、飲み会開いてくださいよお」

英輔「今、就活で忙しいらしい」

中村「シューカツ……大学生で感じすねえ……

：彼氏とかいないんすか？」

英輔「いるみたいだけど、関係ないでしょ。

今時の子なんだし」

中村「遊びたい盛りですもんねえ、ちようど」

英輔「お前は年中遊びたい盛りだろ」

中村「先輩だってそうじゃないすかあ」

英輔「馬鹿、俺は……いらっしやいませ！」

英輔、ロビーから客が近付いて来たのを

察知してケータイをポケットにねじ込む。

○ 映画館(翌日・夕方) (以降の3シーンは

前出のシーンを踏襲)

洋画を観ている香と川原。

川原は爆睡している。

○ 洋食レストラン(夜)

テーブル席で向かい合って食事をしている川原と香。

喧嘩の末、香が席を立つ。

「おい！ 香！」

と川原が呼び止めるも、香は店を飛び出して行く。

○ 洋食レストランの前

店から飛び出した香を追う川原。

川原「香、待てよ、おい」

香「来ないで……」

川原「ちゃんと話しよう」

香「嫌」

香は早歩きで歩いて行く。

やがて横断歩道にさしかかり、香は止まる。

信号が赤だ。

川原「昨日のこと、本当に悪かったと思ってる。ごめん」

香「(涙目でキッと前方を見据えている)」

川原「香は、俺と別れたいの？」

香「(首を振る)」

川原「じゃあ……仲直りしよう」

香「……」

川原「なあ、香」

香「幸ちゃんは、本当に香のこと好き？」

川原「……好きだよ」

香「香は……分からなくなった。幸ちゃん

のこと、本当に好きか……」

川原「……」

○ 大学の教室(昼)

かなり大きいサイズの教室。

まだ授業前なので、教室内はざわついている。

後ろの方の席に青井が一人で座っていて、机に突っ伏して早くも居眠りしている。

「青ちゃん！」

と呼ぶ声がして、青井は「ハッ」と顔を上げる。

目の前に香が立っていた。

香「(笑顔で) 跡ついてるよ、オデコ」

青井「あ……」

青井、机の跡が付いた額をさすり、苦笑い。

○ もんじゃ屋・店内(夜)

もんじゃと格闘している青井を香が見守っている。

もんじゃの壁が決壊し、汁がジュウっと鉄板に広がる。

香「あ……」

青井「(苦笑い) やば……失敗した」

香「聞いて聞いて。香の高校の時の彼氏さん、もんじゃ作るのスッゴイ上手かったんだよ。もんじゃ作るのだったら誰にも負けないって変なプライド持ってた」

青井「……」

香「あれ？ どうしたの？」

青井「俺、不器用だからなあ」

香「(笑って)もんじゃぐらいで凹まないで。青ちゃんのそういう所見て、女の人は不安

になっちゃうんじゃない？」

青井「……」

香「青ちゃん、もつと自信持てばいいんだよ。カッコいいし優しいんだから、その気

になればすぐ彼女さん出来るよ」

青井「そうかなあ……」

香「あ、でも就活はした方がいいかも。やっぱり、ちゃんとお仕事してる人じゃないと香は不安かなあ」

青井「でも俺、夢とかないし……」

香「香の昔の彼氏さん、警察官になったんだって。こないだ久し振りに電話が来てビックリした」

青井「それは……もんじゃの人？」

香「その次の人」

青井「……」

香「そろそろいいんじゃない？ もんじゃ

食べよ」

食べよ」

香、もんじゃをへらで掬い、口に運ぶ。
香「……おいしい (満面の笑み)」

○ 夜道

青井と香、並んで歩いている。
2人共、酔っている。

青井「……昨日、香ちゃん就活だと言ってたじゃん？ 俺、昨日家において、香ちゃんは頑張ってるんだなあと思ってたら、自分が情けなく思えてきちゃってさ……なんか苦しい一日だった……最近、香ちゃんのことばっか考えて、なんかダメだ(苦笑い)」
香「(笑って) 香のファンになったの？」
青井「そう。ファン」
香「もつと早く青ちゃんに出会いたかったなあ」

香、青井と手を繋ぐ。
香「(ふざけた感じで) あれえ。浮気かなあ、これ……」

青井「(緊張して) いや、違うよ」

香「香、彼氏さんともうダメかもしれない……距離置こうってなった」

青井「そっか……そうなんだ……」

香「彼氏さんとうまくいってないし、就活で内定ももらえてない……青ちゃんだけが心の支えだよ」

青井「……」

香「……」

青井「(上ずった声で) あのさあ……あの……」

香「？」

青井「キス、していい？」

香「？」

青井「い、いい？」

香「(黙って首振る)」

青井「だよね……ごめん……なんか、間違えた……ごめん (汗をかく)」

香「(ブツと吹き出してしまふ)」

青井「ごめん……気にしないで……」

香「かわいい、青ちゃん」

青井「空気読めないんだよな、俺……ホントごめん」

青井、いつになくよく喋る。

○ 地下鉄・電車内(夜)

一人で座っている青井。
俯き、相当落ち込んでいる様子。
ポケットから携帯を出し、カチャカチャとメールを打ち出す。

○ 香の実家・香の部屋(夜)

帰宅した香、穿いていたスカートにリセツシュを噴射している。
と、机の上に置いたケータイがバイブする。

香、ケータイ見ると『エースケさんからメールが届きました』と表示されている。
香は早速メール文を読む。
と、すぐにケータイはまたバイブする。
「……」

どうやら今度は『青ちゃん』からのメールが入って来たようだ。

香、『青ちゃん』からのメール文を開く。
『今日はせっかく楽しい時間を過ごしてたのに、変なこと言って空気をぶち壊しちゃってごめん。本気で反省してます。ごめんなさい……。良かったらまた飲みに行こう。』
香、メールを読み、ベッドにバタツと横になる。

香「……アホお……」

○ 都内・高層ビルの前(昼)

就活用のスーツを着た香がビルから出て来る。
「……ウツス」

と私服姿の青井が陰から姿を現す。
香「(笑って) あはっ。ストーカーみたい」

青井「いや、誘ったのそっちじゃん」

香「こないだのこと、青ちゃんずっと気にしてそうだから、しよーがないから誘ってあげたんです。香、優しいですよ」

青井「(苦笑いして) ごめん」

香「(笑って) 世話が焼けるのお……さ、行くよ」

香、歩き出す。

青井、ついて行く。

香、横に並んだ青井と手を繋いでやる。

青井「(バツと顔がほころんだ)」

○ 地下鉄・電車内(昼)

香と青井、手を繋いだまま電車に揺られている。
香「あ、ここ、彼氏さんが働いてるトコ」と香は繋いでいた手を離し、車内に貼られている広告を指差す。
『江東自動車学校』の広告。

香「この学校、都内にある自動車学校の中で、卒業生の事故率が2番目に低いんだって。彼氏さんに何回も自慢された」

青井「へえ……」

香 「彼氏さんが教習所の先生だと助かるよ。ドライブの時、たまに運転しても彼氏さんが隣にいれば安心だもん。ペーパードライバーにならなくて済む」

青井 「……(少し辛そうな顔)」

○ ファーストフード店(夕方)

一人で座っている香、ケータイで『エースケさん』宛にメールを打っている。
『比べちゃいけないんだろうけど、今はカレシさんと一緒にいるよりも、同級生の青ちゃんと一緒にいる方が楽しいし、ラクだし、素の自分を出せる気がします。カレシさんは上から目線で私を見てくれるけど、青ちゃんの場合は……』

「……お待たせ」

と、おぼんにポテトとジュースを乗せた青井がやって来て、香と向き合った席に座る。

香 「(メールを中断し、ケータイを鞆に仕舞い) ありがと」

青井 「メール? いいよ気にしないで」

香 「ううん、ネット見てただけだから」

香、ポテトをつまむ。

青井 「……あのさあ、これ、どう?」

青井、ポケットから2枚のチケットを出す。

香 「何それ……花やしき?」

青井 「うん。入場券……友達からもらってさ

……行かない? 今度」

香 「行きたい! というか香、浅草自体行ったことない」

青井「浅草、いい所だよ。あの辺ぶらぶらしてるだけで楽しいし」

香 「へえ、じゃあいっぱい歩ける靴履いて行かないきゃ」

青井「うん。行こうよ。絶対楽しいよ」

香 「じゃ、空いてる日、調べとくね」

青井 「嬉しいー!」

○ 大学の中庭(日替わり・昼)

ソフトボールの授業が行われている。ジャージ姿の青井、打席に立つ。

と、

「青ちゃん!」

と遠くで声がする。

青井、一端打席を外して声のした方を見ると、香が手を振っている。

青井、照れながら香に手を振り返し、再び打席に入る。

バター青井、ピッチャーの女子が投げた緩い球を……見事に空振り!

○ 大学からの帰り道(夕方)

下校する学生達。

その中に、香と青井の姿もある。周りの目を気にしてか、手を繋いではいない。

香 「(笑って) 4年で体育取ってるの、青ちゃんぐらいじゃない?」

青井 「1年の時、単位落とし過ぎた」

香 「サボってばっかいるからだよ」

青井 「バイトが忙しかったんだよ、サボってたわけじゃない」

香 「最近就活ばっかで全然バイト入れてないから、香は金欠……青ちゃんにいっぱい貢いでもらわなきゃ」

香、手を出して『お金ちょうだい』のポーズ。

青井 「(笑って) 無い無い、俺も」

青井、香の差し出した手をはたき、そのまま香の手を握る。

結局、手を繋いで歩く2人。

香 「あ、明日久し振りに彼氏さんと会う」

青井 「そう……(目が泳ぐ)」

香 「ヤキモチ妬く?」

青井 「どうだろ」

香 「妬いて。いっぱい」

青井 「酷いな……(苦笑い)」

香 「(青井の顔見て) あ……ホントに辛そうな顔してる」

青井 「ヤキモチ妬けて言うからさ」

香 「こないだはゴメンね……だって、タイミング悪いんだもん、青ちゃん」

青井 「え?」

香、青井の頬にキスをする。

青井 「!」

香 「キスしていい? なんて改まって聞かなくていいんだよ」

青井 「ああ……ごめん」

香 「こっちまで照れる」

青井 「……」

香 「……」

青井の緊張した、真面目な顔を見ると、ついつい笑いそうになってしまう香。

青井 「香ちゃん……俺、香ちゃんのこと、好きです……あの……彼氏がいようがいまいが、好きなもんは好きだから……」

香 「ありがと」

青井 「本気で、好きだから……」

香 「香も、青ちゃんのこと好きだよ」
青井 「……」

香 「でも、彼氏さんと青ちゃんを比べるとは嫌。彼氏さんに対しては情があるから、別れる自信がないし……」

青井 「……」
香 「明日彼氏さんに会って、どうなるかわからないけど……夜、メールするね」

青井 「……うん」
青井、自信無く微笑んだ。

○ファミレス・店内(翌日・夜)(以降の2シーンは前出のシーンを踏襲)

テーブル席で向かい合って座っている川原と香。

川原 「じゃあ……もう少し、このままの状態でいようか」

香 「うん……」

○ファミレスの外(夜)

店を出て歩き出す川原と香。

川原 「今日、このまま帰る？」

香 「どっか行きたいの？」

川原 「どうしようか……」

香 「？」

川原 「終電まで、あと2時間ぐらいあるから……ホテルは？」

香 「……」

川原 「行こうよ」

香 「(黙って頷く)」

○青井の実家・青井の部屋(夜)

青井、ベッドに腰掛けてケータイのメール文を読んでいる。

『やっぱり彼氏さんとは別れられなかった。好きとか嫌いじゃなくて、彼氏さんに対しては情があるの。ごめんさい。でも、香は大好きな青ちゃんのことを失うのも嫌。卑怯だって思うかもしれないけど、香はこれからも青ちゃんと良い友達でいたい……』

青井 「……」

青井、ベッドに突っ伏す。

身体を震わせ、泣く。

○花やしき(昼)

『ローラーコースター』に乗り絶叫している香と青井。

× × ×

『スカイシップ』に乗り園内を周遊して

楽しんでいる香と青井。

× × ×

『スリラーカー』の中、手を繋いでいる香と青井。香はかなり怖がっている。

× × ×

『しあわせ橋』という赤い橋を渡る香と青井。池にいる鯉を指差して笑顔がこぼれる。

× × ×

屋上広場『スカイプラザ』のベンチに腰掛け、休憩している香と青井。

狭い屋上広場に居るのは2人だけだ。

香、青井に身を寄せ、疲れた素振り。

「青ちゃんが彼氏さんだったらホテル行くのになあ……疲れちゃった」

と言ってみる。

青井 「……(目が泳ぐ)」

○ラブホテルの一室(夕方)

香 「いいよ、自分で拭く」

裸の香が、同じく裸の青井からティッシュを受け取り、慣れた感じで自分の下腹部を拭いている。

青井は新たにティッシュをむしり取り、自分の股間を拭く。

香が青井を見て笑う。

青井 「……何？」

香 「男の人がそうやって拭いてる姿、情けなくて好き」

青井、苦笑い。

ベッドの上の、裸の二人。

香、足の裏を青井の胸に当て、揺する。

香 「(ふざけて) 青井涼太あ、祝初体験」

青井、苦笑いを浮かべ、香の両足首を掴み、自分の胸に押し当てたり、足の裏同士をくっつけたりしてぎこちなく弄ぶ。

やがて青井は香の尻に大きなホクロがあるのを見つけ、触ってみる。

香 「香の秘密……」

青井 「(にやける)」

香 「エッチな顔」

青井、ホクロをつまむ。

香 「こりや、イタズラするなあ」

香、青井の胸を足で小突く。

青井 「笑ってごめん」

青井、香の横に寝そべる。

香にキスをする青井。

香 「エッチ、好きになった？」

青井 「うん」

香 「中毒？」

青井「うん」

青井、香の上に覆い被さる。

「あ……」

と声を漏らす香。

香「ギュッとして……」

青井、香を強く抱き締める。

香「青ちゃん、香のこと好き？」

青井「うん」

香「ちゃんとやって」

青井「好きだよ」

青井、香に長いキスをする。

香「足の方に、なんか当たってる」

青井「……」

香「また大きくなってるでしょ」

青井「うん」

香「ホントに中毒になったんだ」

青井「うん」

青井、がむしゃらに香の唇を吸い、そのまま再び挿入する。

香、喘ぐ。

○ ホテルを出た後、浅草の仲見世通りを歩く香と青井(夜)

2人、手を繋いで歩いている。

香の鞆の中で、ケータイが鳴る。

香、立ち止まり、ケータイをチェックする。

香「(ケータイを見て) 彼氏さんからメールだ」

青井「……」

香「ごめん。ちょっと待ってて」

香、メールを打ち始める。

青井、苛立っている。落ち着きがない。

香「彼氏さんからのメール見ると、現実に引き戻されるな」

青井「……」

香「(メールを送信し終え) ごめん、行く」

香、そそくさと歩き出す。

青井、すぐに香に追いつき再び手を繋ぐ。うとするが、香は手を引く込める。

青井「……どうしたの？」

香「なんか……罪悪感」

青井「え？ 何で」

香「だって……浮気だもん、これ」

青井「彼氏、メールで何か言ってきたの？」

香「ううん、別に。今日は飲んで帰ります。だって。心配だな……」

青井「……」

青井、再び香の手を掴もうとするが香はスリリとかわす。

香「嫌」

青井「手繋ぐぐらい、いいじゃん」

香「香の気持ちも考えてよ」

青井「……」

香「香、彼氏さんがいる時に彼氏さん以外の人とエッチしたの、初めて」

青井「……」

香「青ちゃん、香のこと軽い女だって思ってるんでしょ」

青井「思っていないよ、そんなこと」

香「嘘。思ってる」

青井「思っていないって」

香「香のこと、甘く見ないでよ」

香、ツンとすまして早足で歩いて行く。

青井「香ちゃん！」

○ 地下鉄・電車内(夜)

座席に座っている香と青井。

青井「俺、香ちゃんが軽い女だなんて思っていないよ。香ちゃんは優しいから、俺の気持ちに伝えてくれて……悪いのは俺だよ。優しい香ちゃんに甘えて、浮気させてさ」

香「……」

青井「浮気させちゃって、ホントにごめん」

香「……」

青井「俺、香ちゃんのこと、好きだから……好きだから浮気させちゃって……」

香「(笑みがこぼれ) もういいから」

青井「……？」

香「浮気、浮気ってわざと言ってる？」

青井「いや、俺は、ただ……」

香「はい(と手を差し出す)」

青井「……いいの？」

香「どうぞ」

青井、香の手を握る。

香「元気になった？」

青井「(微笑んで) うん」

香「嬉しそうな顔……重症だね。香中毒」

青井「うん」

香「香、青ちゃんのママになった気分」

青井、幸せそうに笑う。

○ ビジネスホテル・フロント(朝)

美人の宿泊客がルームキーを課員の中村に預け、外出して行く。

「行ってらっしゃいませ！」

と、ひときわ笑顔の中村。

中村は預かったルームキーをキーボックスに入れ、その宿泊客の宿泊カード(名前や住所が書いてある用紙)をチェック

する。

中村「……あ」

宿泊カードの端が折り曲がっている。

英輔が中村の方を見てニヤニヤしている。

中村「(宿泊カードの折れ曲がっている部分を目指し)これ、チェック入れたの先輩すよね」

英輔「チェックインしたの俺だもん」

中村「めっちゃキレイでしたね……俺もチェック入れよ」

中村、宿泊カードをさらに深く折り曲げる。

ベテラン女性課員が英輔と中村に近寄り

「……まったく、無意味な遊びやってないで仕事に集中しなさいよ」

と吐き捨て、控え室へと入って行く。

中村「(気にせず)あ、そういうやメル友の女子

大生、どうになりました？」

英輔「同じ学校の奴と浮気してるって」

中村「へー、やりますねえ」

英輔「で、そいつが本気になっちゃってて、

悩んでるみたい」

中村「浮気相手は軽い奴に限りますよね」

英輔「お前みたいだね……まあ今度、色々悩

み聞いてくるよ」

中村「え？ 会うんすか？」

英輔「うん」

中村「マジすかあ！ 合コンお願いしますすよ

お！」

英輔「そういう話の流れになったらなあ」

中村「合コン！ 合コン！」

中村、一人で盛り上がる。

○ 大学の教室(昼)

香が就活用のスーツを着て講義を聞いている。

香の隣の席には、青井。

○ 大学の校門付近

校門から出て行くこうとする香を追う青井。

青井「送って行くって」

香「結構です」

青井「俺、香ちゃんと一緒にいたい」

香「香は忙しいの！ 青ちゃんと遊んでる

暇はないの」

青井「送って行くだけだから」

香「電車の中で、面接で喋ることとか色々

予習して行きたいの。青ちゃんがいると気が

散っちゃうでしょ」

青井「俺、ずっと黙ってるから。ただ、傍に

いるだけだから」

香「そんなことされたって、嬉しくない」

青井「……待ってよ！」

青井、香の腕を掴む。

香「やめて」

香、腕を振り払う。

青井「どうして最近冷たいんだよ」

香「別に。普通です」

青井「メールも返してくれないし、会う時間

も作ってくれないじゃん」

香「だから、就活が忙しいの」

青井「一週間に一日ぐらい、暇な日あるだろ」

香「休みの日でも、色々やることがあるの」

青井「会ってくれてもいいじゃん」

香「(青井を見据え)……あの子、香は青ち

やんの彼女さんじゃないんだよ。青ちゃん

には香を束縛する権利なんて無いんだよ」

青井「そりやそうだけども……」

香「じゃあね」

香、歩き去る。

立ちつくす青井。

青井「……」

○ 走る電車の中

吊革に掴まり電車に揺られている香、鞆からケータイを出してメールをチェックする。

新着メールが3通届いている。

いずれも『青ちゃん』からだ。

『さっきはゴメン。反省してます』

『面接の後、10分でもいいから会えないかな』

『愛してる』

香、溜息。

○ 面接会場

面接を受けている香。

香「私はよく、友達や先輩に素直で真っ直

ぐな子だと言われます。私は自分のこの性

格を一番の長所だと思っています」

香、3人の会社役員達の前で飛び切りの

スマイル。

○ 面接会場のビルの外(夕方)

面接を終えた香が出て来る。

ビルの陰に、青井の姿。

香、青井に気付かずそのまま歩く。

青井、気付かれぬように香の後をつける。

○ 雑踏の中

歩く香。

追う青井。

○ 池袋駅・いけふくろうの前

やって来た香、ケータイを鞆から取り出して電話をかける。

いけふくろうの前にいた男（英輔）が電話に出る。

香 「もしもし……今着きました」

英輔 「ホント？ 俺今いけふくろうの前にいるよ」

香と英輔、お互いの存在に気付き、見つめ合う。

香、電話を切る。

英輔もケータイをポケットに仕舞う。

香、英輔の傍に歩み寄り

「はじめまして。香です」

と。ペコッとお辞儀。

英輔も笑顔で

「よろしく」

と頭を下げる。

人波に揉まれながら、青井が2人のことを遠くからジッと見つめている。

その表情には、奇妙なまでに感情が籠っていない。

サササつと青井の足元にゴキブリが這ってくる。

青井、グシヤツとそれを潰そうとするが、

逃げられる。

青井、チツと舌打ち。

英輔と香が連れ立って歩き出したのを見て、青井は後を追う。

○ ダイニングバー・店内（夜）

香と英輔が飲んでいる。

2人とも、だいぶ酔っている。

香 「香、若いママに憧れてるんです。だから、早く結婚してママになりたいなあと思ってる」

英輔 「今の彼氏と結婚して？」

香 「さあ……（笑顔で首を傾げる）」

英輔 「まだ親になるのは早いでしょ。もったいないよ」

香 「そんなこと言って、奥さん若いんですよ」

英輔 「それはまあ、デキちゃったわけだから、ウチの場合」

香 「結婚する気、無かったんですか？」

英輔 「考えてなかったな」

香 「で、どうです？ 結婚して」

英輔 「人生やり直せるなら、絶対しない」

香 「どうしてです？」

英輔 「人生損してる気がする。同年代ぐらいで独身の奴見ると、心底羨ましくなる。なんか悔しくなる」

香 「えー、独身の人の方が寂しいんじゃないですか」

英輔 「寂しくないよ。独身の奴は自由だから。金もあるし。女の子と遊ぶのも、自由だから」

香 「笑って」でも、遊んでるじゃないですか、結婚してもこうやって」

英輔 「独身だったら、もうとつくに君のこと口説いてるよ」

香 「独身だったら、会ってませんよ、私」

英輔 「苦笑い」

香 「でも、子供とか、かわいくないんですか？」

英輔 「子供はかわいいよ」

香 「子供、は？」

英輔 「うん」

香 「奥さんは？」

英輔 「奥さんの話は、あんまりしたくない」

香 「えー、聞きたいです。もう好きじゃないんですか？」

英輔 「子供の父親と母親なわけだから、好きとかじゃない。ただの家族」

香 「ただの？」

英輔 「何て言うか、お互い男と女の関係としては終わってるけど、子供もいるから別れるわけにもいかない。仕方なく一緒にいるだけの関係」

香 「それ、仮面夫婦じゃないですか」

英輔 「そうなるのかな……」

香 「全然無いですか？ 夫婦の、営み？」

英輔 「子供産まれてからは全然。近親相姦みたいで気持ち悪いし」

香 「なんか哀しいですね……」

英輔 「寂しいよ、ほんとに。でもだからって浮気してバレようもんなら人生オシマイだからね。地獄だよ」

香 「結婚ってそんなものなのかなあ」

英輔 「まあ人それぞれだろうけど（香の空いたグラスを見て）……あ、何か頼めば」

英輔、香にメニューを渡す。

香 「このカクテル美味しいですね。飲み会つていたらだいたい和民とか白木屋だから、こういうお店新鮮です」

英輔 「学生はお金無いからね……ま、俺も余裕あるわけじゃないけどさ」

香 「今月バイト入れなくて、ほんとカツカ

ツなんです。来月は引き籠るしかないです」
英輔「お金無いと、遊びにも行けないもんね」
香「だから、こういうオトナな感じのお店
でお酒飲めて幸せです。こういうオシャレ
なお店知ってる人、ステキ」
英輔「(照れ笑いを浮かべる)」

○ 同・トイレ

英輔、用を足しながら財布の中身を見て
いる。
溜息が漏れた。

○ 同・店の外

店から出て来た香と英輔、並んで歩く。
向かいの通りに青井の姿。
青井、香と英輔の尾行を続ける。
香、英輔と手を繋ぐ。

青井「……」

○ カラオケボックス・室内(夜)

歌を歌い終わった英輔、マイクを置く。
「英輔さん、うまい」
と拍手する香。

英輔「俺が大学の時に流行ってた歌」
香「香も昔どつかで聴いたことあります。
いい歌ですね」

英輔「……香ちゃん、何か歌わないの？」
香「えー、私ですかあ……なんか恥ずかし
いです(選曲本を捲りながら)」

英輔「いつも歌わないの？」
香「友達と来ると歌うんですけど……今日
はちよつと……」

2人、しばしの沈黙。
香、選曲本から顔を上げると、思いのほ
か英輔の顔が近くにあった。

英輔「……(香を見つめる)」
香「……」
英輔「……(ずつと香を見つめる)」

香「……(目を瞑ってみた)」
英輔、香にキスをする。

香「……(俯く)」
英輔、そのまま香をソファの上に押し倒
し、激しくキスをする。
頃合いを見て、ズボンのベルトを緩める
英輔。

香「あ、あの、待って……」

英輔「？」

香「お金ください」

英輔「？」

香「浮気は嫌だから、お金ください。お金

でしたんだったら、しょうがないって割り
切れると思うから……」

英輔「……いくら？」

香「いくらでも……英輔さんが決めてくだ
さい」

英輔「分かった」

英輔、身を起こし、ポケットから財布を
出す。

香「後でいいです……」

英輔「ああ、そう」

英輔、財布を仕舞い、再び香に覆い被さ
る。

ドアの小窓から、青井の顔がニュツと覗
く。外の廊下から、室内を覗き見たのだ。

青井「！」

青井、部屋の中でもつれ合っている香と
英輔を見てショックを受け、すぐに立ち
去る。

青井に覗かれたことなど露知らず、2人
の吐息は荒くなる。

英輔は香のパンティを脱がせ、自らもズ
ボンとパンツを下ろす。

英輔は香に覆い被さる。

香「程なくして英輔の動きが止まる。

英輔「ダメだ……」

香「？」

英輔「立たない……俺、肝心なところでビビ
りだから」

香「香がお金とか言ったからですか？」

英輔「いや、違う」

香「……罪悪感？」

英輔「(無視して)……お金はちゃんと払うよ」

香「……指でやってください」

英輔「え？」

香「途中でやめられても、嫌です」

英輔「……」

英輔、香にキスをしながら、言われた通
り指を入れてやる。

小さく声を漏らす香。

テーブルの上に置いた香のケータイが激
しくバイブする。

『着信 青ちゃん』と表示されている。
英輔、行為を続ける。

テーブル上のケータイ、生き物のよう
に震えながらのたうち回っている。

○ 池袋駅・東武東上線・改札(夜)

香と英輔、改札前で握手する。

英輔「じゃあ、また」

香「また」

英輔「なんか……ごめん」
香「いえ、こちらこそ」

英輔「またメールするよ……じゃあ」
香「(笑顔で手を振る)」

英輔、去って行く。

香、東上線の改札に入る。
遠くから見えていた青井、香を追って東上線の改札へ。

○ 同・東武東上線のホーム

トボトボ歩いている香。

「ねえ、あのさあ」

と肩を叩かれ、驚いて振り返る香。

香「青ちゃん！」

青白い顔で、青井が突っ立っている。

青井「ちよっと話しようよ」

香「何でここにいるの！」

青井「たまたま用事があつて……」

香「嘘……香のことつけてたの？」

青井「まあね」

香「最低！ 何考えてんの！」

香、歩き出す。

青井「待って、香ちゃん」

青井が香の腕を掴む。

香「やめて！ 帰って！」

香、腕を振り払うが、青井の手は離れない。

香「帰ってよ！ 青ちゃんとは話したくない！」

青井「今日、何してたの……」

香「関係無いでしょ！ 香が何しようが」

青井「就活だ、忙しいって言って、男と遊んでるじゃん……あの人が彼氏？」

香「だから関係無いでしょ！ 青ちゃんには」

青井「関係あるから。俺、好きなんだよ。香ちゃんのこと」

香「香は、もう好きじゃない」

青井「……は？」

香「だって香……彼氏さんとうまくいってなくて淋しかっただけだもん。それぐらい分かってよ……馬鹿じゃないの」

青井「何だよそれ……」

香「はじめから青ちゃんと付き合う気なんて無かった……好きでも何でも無かった」

青井「……」

香「誰でも良かったんだよ……一緒にいて楽しかったら……香は青ちゃんが思ってるような子じゃないんだよ」

青井「……」

香「もういいでしょ？ 手、離してよ！」

香、掴まれている方の手で青井の胸を小突く。

手は簡単に離れる。

香「もう青ちゃんには会わないから。メールも電話も、全部拒否するから」

青井「嫌だよ……」

香「サヨナラ」

青井「……ふざけんなよ！」

香、勢い良く後方に倒れ、地面に腰を強く打つ。

香「痛い！」

青井「あ……」

香「痛いよ！ 痛い！」

青井「(我に返り) あ、あの……ごめん……」

香の上げた大声で、周りの人々の注目が集まる。

中年の駅員が遠くから走り寄って来る。

○ 夜道

○ 地下鉄・電車内(夜)

座席に座っている青井。

俯き、肩を震わせ泣いている。

香と会っていた男への嫉妬、香にフラれた悔しさ、自分の情けなさなど、色々な感情がぐちゃぐちゃに絡まって、涙が後から後から湧いてくる。

香「もういいでしょ？ 手、離してよ！」

香、掴まれている方の手で青井の胸を小突く。

手は簡単に離れる。

香「もう青ちゃんには会わないから。メールも電話も、全部拒否するから」

青井「嫌だよ……」

香「サヨナラ」

青井「……ふざけんなよ！」

香、勢い良く後方に倒れ、地面に腰を強く打つ。

香「痛い！」

青井「あ……」

香「痛いよ！ 痛い！」

青井「(我に返り) あ、あの……ごめん……」

香の上げた大声で、周りの人々の注目が集まる。

中年の駅員が遠くから走り寄って来る。

香「早く！」

青井「(分かったと頷く)」

香「早く！ 行って！」

青井「……」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

青井「早く！」

香「早く！」

○ 夜道

○ 地下鉄・電車内(夜)

座席に座っている青井。

俯き、肩を震わせ泣いている。

香と会っていた男への嫉妬、香にフラれた悔しさ、自分の情けなさなど、色々な感情がぐちゃぐちゃに絡まって、涙が後から後から湧いてくる。

自宅への道を歩く香。
まだ腰が痛むのか、腰を押さえて立ち止まる。

空を見上げると、星が瞬いている。
満天の星空だ。

香、鞆からケータイを取り出し『幸ちゃん』に電話してみる。

○ バー・店内（前出のシーンを踏襲）

一人で飲んでいる川原。

キャバクラ『クレア』で真希をフツて来た後なので、落ち込んでいる。

テーブルの上でケータイがバイブする。

少し迷ってから電話に出る川原。

川原「……もしもし」

○ 夜道で電話している香

以降、バーで話している川原とカットバックで繋げる。

香「今何してるの」

川原「……飲んでた。一人で」

香「一人で？ 淋しい。香も一人だけど……」

……今日香のウチの方、すごく星が綺麗だよ……」

……幸ちゃんと一緒に見たかったな（自然に涙が出て来る）」

川原「え？ 泣いてるの？ 何かあったの？」

香「ううん、別に……幸ちゃんの声聞いたら、涙が出て来ちゃった……ごめんね……」

……」

川原「何だよ、大丈夫か？ 就活頑張り過ぎなんじゃない？ 近いうちに会おうよ、息抜きのもりで……」

香「香も会いたい、幸ちゃんに……幸ちゃん、好きだよ」

川原「おい、大丈夫かよホントに……飲んでるの？」

香「香、気付いたの。香のこと、ちゃんと分かってくれるのは幸ちゃんだけだ……」

……幸ちゃんと、早く会いたいよ」

川原「ちゃんと、やり直そうか」

香「うん……仲直りしよ。香、幸ちゃんとずっと一緒にいたい……幸ちゃん、香ね、すごく淋しかったの（涙で声にならない）」

……」

川原「ちゃんと、やり直そうか」

香「うん……仲直りしよ。香、幸ちゃんとずっと一緒にいたい……幸ちゃん、香ね、すごく淋しかったの（涙で声にならない）」

……」

川原「ちゃんと、やり直そうか」

香「うん……仲直りしよ。香、幸ちゃんとずっと一緒にいたい……幸ちゃん、香ね、すごく淋しかったの（涙で声にならない）」

……」

○ 池袋駅・東武東上線・改札（数時間前・夜）

握手をして別れる英輔と香。

英輔「またメールするよ……じゃあ」

香「笑顔で手を振る」

英輔、香と別れ、去って行く。

○ 同・地下鉄の券売機前

一人になった英輔、財布の中身を見て大きな溜息。

①『英輔と真希』

○ 英輔の父母が住んでいるマンションの廊下（夜）

英輔が父母の部屋の前で佇んでいる。

やがて玄関ドアを開け、英輔の母・光子（61）と隼人が家の中から出て来る。

（61）と隼人が家の中から出て来る。

隼人「パパ、ママはあ？」

英輔「ママはまだお仕事。さ、帰るよ」

光子「今日はおばあちゃん家に泊まってく？」

隼人「いい。おウチに帰る」

光子「あら。おばあちゃん淋しいなあ」

隼人「今度ママと泊まりに来る。バイバイ」

光子「笑顔で」バイバイ、隼人」

英輔「あ、お母さん、悪いんだけど、タクシ

ー代、貸してくれない？」

光子「あら、今日は車じゃないの？」

英輔「車、真希が使ってるんだ。あいつも免許取ったから」

光子「そう……待ってね」

光子、一端家の中へ引つ込む。

隼人「パパあ、お金無いの？」

英輔「いや、家に忘れちゃった」

隼人「ふーん……」

光子「再び家から出て来て（これで足りる？）と5千円札を英輔に渡す。」

英輔「ごめん」

英輔、5千円札を財布に仕舞う。

○ 地下鉄・電車内（夜）

英輔と隼人、並んで座っている。

英輔はタクシー代を節約したのだ。

隼人「タクシーじゃないの？」

英輔「帰りにアイス買ってあげる」

隼人「……いらない！（膨れる）」

○ 松山家・寝室（その夜）（前出のシーンを踏襲）

英輔と隼人が布団の上で眠っている。

突然、家の電話がけたたましく鳴り、先に目を覚ました隼人が

「パパ、パパ」

と英輔を起こす。

ようやく目覚めた英輔、眠い目をこすりながら起き上がって電話に出る。

英輔「……はい、松山ですが……はい……え

え

え

え

え

え

え

え

え

え

……真希が？ 病院？」

○ 総合病院・夜間外来・入口（深夜）

一台のタクシーが滑り込んで来る。

英輔が隼人を抱っこしたままタクシーから降り、病院の入口へと走る。

○ 同・外来受付

隼人を抱き、汗びっしょりで駆け込んで来た英輔を見て、受付事務員の女は目を丸くする。

事務員「どうなさいました？」

英輔「息を切らし」あ、あの……松山ですが」事務員「松山様ですね、お子さん、どうかなさったんですか？」

英輔「あ、いや、この子は別になんともないんです。妻がこの病院に運ばれたって……」事務員「あ、奥様が……すいませんでした」事務員、慌てて急患のリストをパソコン画面で確認する。

○ 同・診察室

蒼白い顔をした医師・宮田（38）から真希の診察結果を聞いている英輔。

隼人は英輔の膝の上にちよこんと座っている。

宮田「(ぶつぶつと独り言を言う様に)まあ急性アルコール中毒ですね。119番した飲食店の、キャバクラって言うんでしたっけ、ああいうお店……その従業員の方の話だと、だいぶお酒を飲んでたようですね。しかし不幸中の幸いですよ、車に乗り込む直前に意識を失って倒れたようですから。あんな状態で車に乗ってたら間違いなく大事故を起こしますよ。飲酒運転で人なんか轢き殺しちゃったら人生終わりですよ」

英輔「(話に割って入る)あの……真希は、大丈夫なんですか？ 怪我とかは？」

宮田「……倒れた時に頭を打ったみたいなんです。額と鼻の下に擦り傷が出来ていますが、まあ残るような傷ではないです。今は点滴を打って治療していますが、意識もはっきりしていますし、点滴が終わったら帰っていただいて大丈夫です」

英輔「そうですか……ありがとうございました(深々と頭を下げる)」

隼人「(真似して)ありがとございました」宮田「……救命救急はどこも人手不足ですし、救急車だって台数に限りがあります。医療

の現場は常に切迫しているんです。酒を飲み過ぎた人間に時間を割くことは、我々医師にとつては大変不愉快な……」

「先生！ ICU3番ベッドの金沢寛之さんの血圧が急激に下がっています！」

と看護師が部屋に飛び込んで来る。

宮田「分かった、今行く……では……」

宮田、英輔に一礼して立ち去る。

英輔「すいませんです……」

英輔、シヨンボリと肩を落とす。

隼人「(落胆する英輔の顔をジッと見て)パパ……ママ悪いことしたの？」

英輔「(首振る)怒られたのはパパ」

隼人「……(怪訝な表情)」

○ 同・ロビー（夜明け間際）

ロビーのソファに座り、眠っている英輔。隼人も英輔の膝を枕にして眠っている。

英輔と隼人の隣に、退院の手続きを終えた真希が座る。

擦り傷を負った額と鼻の下に絆創膏が貼られている。

真希「……ねえ(英輔の肩を叩く)」

英輔「(起きない)」

真希「ねえ(強めに叩く)」

英輔「ん……(目を覚まし、真希を見る)あ……」

真希「(絆創膏を貼った顔を隠すように俯く)」

英輔「傷、大丈夫？」

真希「うん……」

英輔「体調は？ 気持ち悪いとかそういうのは？」

真希「ちよつと頭が痛いけど、平気」

英輔「そっか……良かった」

真希「怒んないの？」

英輔「ん？」

真希「怒ってよ。スッキリするから」

英輔「怒るのは、俺じゃなくてコイツ」

英輔、眠っている隼人を見る。

英輔「俺も、どうせ良い親父じゃないし、お

あいこだよ」

真希「……」

英輔「お前を怒る資格なんて無い」

真希、自己嫌悪の念と、英輔の優しさに涙が出て来る。

英輔「世間には良いパパとママがいっぱいいるのに、かわいそうな奴だよ」

真希「そうね……」

英輔「……」

真希「……」

真希「……」

真希「……」

真希「……」

真希「……」

英輔「帰ろうか」
真希「うん」

眠っていた隼人、目を覚ます。

隼人「(真希の顔を見て、笑う)わー、ママ変な顔！」

真希「転んじゃった(苦笑い)」

隼人「アンパンマンにやつつけられたバイキンマンみたい！」

真希「(涙がさらに出てくる)」

隼人「!(母親の涙を見てビックリする)」

真希「ごめんね、隼人」

隼人「(自分のせいだと思い)ママ……ごめんなさい」

真希「隼人……」

真希、隼人をきつく抱き締める。

隼人「ママ……ごめんね」

真希「いいの……大丈夫(無理矢理笑顔を作る)」

隼人、怪我をした顔で泣き笑いをして
いる真希の表情をまじまじと見ると、再び
笑いが込み上げてくる。

真希「……もう、笑ってるじゃない！」

隼人、我慢出来ず、笑う。

英輔と真希も笑った。

英輔「よし、帰ろう！」

家族三人、ソファから立ち上がる。

○ コンビニの外(半年後・昼)

桜が咲きかけている。

ブラブラ一人で歩いて来た香が、コンビニ
二へと入って行く。

①『次の春』

○ 同・店内

来店した香に

「いらっしやいませえ」

と店員が声をかける。

香、何となくレジの方を見る。

香「あ……」

英輔「あ……」

店員は、英輔だった。

○ 喫茶店(夕方)

お茶している英輔と香。

英輔「借金? 凄いな」

香「全然。そこしか就活受からなかったん
です」

英輔「いや、凄いな。立派、立派」

香「来週から研修始まるんで、不安ですよ。
鬱です」

英輔「そっか、もうそんな時期か」
香「明日、大学の卒業式なんです」

英輔「ああ、おめでとう……あ、そう言えは、
あの浮気してた子とはどうなったの?」

香「彼氏さんとヨリ戻してからは全然……
向こうが香のこと避けてるみたいで」

英輔「まあ、分かる気もするかな」

香「勝手だけど、青ちゃんには幸せになっ
てもらいたいです。そうじゃないと、何
だか悪い気がして……」

英輔「優しいね、香ちゃん」

香「優しくしないでよ、香……」

英輔「いや、優しくしていい子だよ。優しいし、
かわいいし」

香「(笑って)何も出ませんよ、そんなお世
辞言ったって」

英輔「いや、本心、本心」

香「英輔さんの方は、どんな感じですか?
ビックリしましたよ、さつき」

英輔「今は嫁に昼間の仕事させてるからさ、
俺が昼間も働かないと、家計がキツイ」

香「夜勤もまだやってるんですか?」

英輔「うん、ダブルワーク」

香「すごい、大変」

英輔「もう慣れたよ、白髪増えたけど」

香「今日も、これから?」

英輔「今日、明日は夜勤は休み」

香「そうですか。じゃ、ゆっくり寝てくだ
さいね」

英輔「……たまには、ストレス発散したいな」

香「……?」

英輔「カラオケでも行く?」

香「(笑って)何も出ませんよって言ったじ
やないですか」

英輔「いや、歌いたいだけ」

香「男の人ってみんなそうなんですか?」

英輔「……」

英輔、所在無げに笑う。

○ ラブホテルの一室(夕方)

ベッドの上で、英輔と香が裸で寝そべっ
ている。

香「ちゃんと出来たじゃないですか」

英輔「ん?」

香「(からかう様に)罪悪感、無くなっちゃ
ったんですか?」

英輔「最近、家でも時々やるようになったか
ら」

香「奥さんと?」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

英輔「うん」

香 「変なの。奥さんとエッチするようになったら、他の人も出来るようになるんですか？」

英輔「家でやんないで外だけでやってるより、家でも外でもやってる方が、うまく割り切れる……」

香 「……(首を傾げて) 奥さんのこと、また女として見られるようになったってことですか？」

英輔「いや、諦めたんじゃない、自分なりに自分の人生を」

香 「!?」

英輔「要は、俺も大人になったってこと……なんてね」

英輔、一人で照れ笑い。

英輔「(ズボンから財布を出し) くれぐれも」

香 「やめてください。援交じゃないんだから」

英輔「お金貰った方が割り切れるんじゃないの、そっちは」

香 「じゃあ、貰ってきます」

英輔「(財布の中身を見て) ……5千円でいいかな」

香 「値切る気でしょうお」

英輔「バレたか」

香と英輔、裸のまま自堕落に笑う。

○ 一人、帰路を行く英輔(夜)

英輔「……」

ふとケーキ屋の前で立ち止まる。

○ 松山家・玄関(夜)

「ただいま」

と言って、買って来たケーキの包みを持った英輔が帰宅する。

DKで夕飯を作っていた真希、

「おかえり」

と迎える。

真希「(英輔が手に持っている包みを見て) ……何それ？」

英輔「安かったからケーキ買って来た。お土産」

真希「ホントお、嬉しい。何かいいことでもあったの? (笑う)」

英輔「いや、俺が食いたかっただけ」

真希「(寝室に向け) 隼人お! パパがケーキ

買って来てくれたよ」

隼人、寝室から玄関に飛んで来る。

隼人「(英輔が持っている包みを奪い取り) ケーキ、ケーキい! (と、はしゃぐ)」

真希「こら。先にパパにおかえりでしょ」

隼人「パパ、おかえりい」

英輔「ゲンキな奴」

真希「ほんと」

贖罪の意味が込められたケーキを持ち、

走り回る隼人。

そんな隼人を温かく見つめる英輔と真希、一家団欒。

○ 大学の正門前(翌日・昼)

『××大学卒業式』と書かれた看板が立って掛けられている。

○ 同・体育館

卒業式後の立食パーティーが行われている。

艶やかな着物を着た女子、スーツをピシッと着込んだ男子。卒業生達は酒を飲み、談笑し、皆楽しんでいる。

ピンク色の着物を着た香も楽しげな表情で卒業生達と談笑している。

と、スーツ姿の青井が香の前に現れる。

青井「久しぶり」

香 「……」

青井「俺、ずっと謝ろうと思ってた。ごめん……あの、去年の駅でのこと」

香 「……(黙って頷く)」

青井「あと……就職おめでどう」

香 「ありがと」

青井「……」

香 「青ちゃんは? 就職は?」

青井「とりあえず地元でバイトする。やりた

いこと、見付からないし……」

香 「そっか……」

青井「……」

香 「青ちゃん、最近どう? 元気してた?」

青井「まあ、普通に」

香 「彼女さんは?」

青井「相変わらずいない(苦笑い)」

香 「相変わらずか……」

青井、香の前に右手を差し出す。

香 「?」

青井「……またね」

青井は別れの握手をしたらしい。

香 「……バイバイ」

香、握手をしてやる。

青井「あのさ、俺、香ちゃんのことホントに好きだった……」

香 「……」

青井「これからも、ファンとして香ちゃんのを

こと陰ながら応援する……」
緊張で声が震え、青井の笑顔は引き攣っている。

香 「ありがと……」

青井 「幸せにね」

香、小さくなくなっていく青井の寂しげな背中を見つめる。

少しだけ、泣きそうになった。

○ 大学の近くのスーパーマーケット・駐車場(夕方)

着物のまま歩いて来た香、駐車場に停まっている一台の車の助手席に乗る。

○ その車の中

運転席に座っていた川原、乗ってきた香に

「卒業おめでとう」

と言って微笑む。

香 「ピンクの着物にして正解だった。みんなに可愛いって言われた」

川原 「良かった、良かった」

香 「えーっと……これから着物返しに行つて、それからまた学校に来てゼミの飲み会、8時から上野でサークルの追い出しコン

パ……おにいさん、今日は大変よ」

川原 「笑って」今日はちゃんとアッシー君やりますよ」

香 「初任給出たら、お寿司奢ってあげる」

川原 「楽しみに待ってます」

香 「溜息をつき」でもやっぱり、働きたくないなあ。憂鬱……」

川原 「働き出しちゃえば、すぐ慣れるって。社会人って言ったって、同じ人間なんだし、

今までと何も変わらないよ」

香 「香には宇宙人に思える」

川原 「ま、2、3ヶ月我慢すれば仕事も楽しくなるって」

香 「みんなと同じこと言ってる……」

川原 「苦笑い」

香 「香、早く結婚して主婦になりたい」

川原 「笑って」働きたくないだけだよ、それ」

香 「違っよ、幸せになりたいの、出来るだけ早く」

川原 「……幸せねえ(訝しげな表情)」

香 「(不安を振り払うように)ねえ幸ちゃん、チュウして」

川原 「は？ 今？」

香 「うん、今」

川原 「何で……」

香 「いいから、チュウ」

川原、香にキスをする。

香 「もう一回」

川原 「……」

香 「もう一回！」

川原、言われた通りもう一度キスをする。

香 「……幸せにしてね、幸ちゃん」

川原 「ああ……」

香 「約束だよ」

川原 「分かった」

川原、香との会話から逃れるように車のエンジンをかける。

○ 駐車場から動き出す川原の車

川原の車は駐車場から出て、曇天の空の下を走り去って行く――。

○ 松山家・寝室(夜)

布団を並べ、英輔と真希と隼人が寝ている。

寝息をたててスヤスヤと眠っている妻と息子とは対照的に、英輔は寝返りを打ち、

寝付けられない様子。

枕元で、英輔のケータイがバイブする。英輔、ケータイを開く。

『カオリさん』からメールだ。

『無事卒業しましたあ！ 香の着物姿、どうですかあ？』というメッセージに、

着物姿の香がカメラに向かって変な顔でピースをしている写真が添付されている。

英輔 「……(食い入るように香の写真を見つめる)」

真希 「……先生……」

英輔 「！(ドキッとしてケータイを閉じる)」

真希 「(再び寝息)」

英輔 「……(真希の言葉が単なる寝言と分かり、安堵の表情)」

英輔、少し迷ってから香からのメールを

消去する。

大きな溜息。

○ 同・DK

DKに来た英輔、電気を点けて冷蔵庫を漁る。

と、昨日買って来た苺のショートケーキ

がまだ残っている。

英輔、ケーキを冷蔵庫から取り出す。

ケーキの紙箱に貼られている賞味期限表

示を見る英輔。

英輔「(舌打ちして) 切れてるし……」

英輔、賞味期限が切れていてもまあいいかと手掴みでケーキを口に運び、むさぼり食う。

と、後ろからニュッと手が伸びてきてケーキの上に乗った苺を掴む。

英輔「!(驚き、振り返る)」

真希「明かり点けるから、目が覚めちゃったじゃん」

いつの間にか起きてきた真希が立っていた。

真希、苺を口に入れる。

真希「(苺をムシャムシャやりながら) 嫌な夢

見ちゃった」

英輔「あ、そう言えば、寝言言ってた」

真希「え? 何て言ってた? (気になる)」

英輔「忘れた……意味不明なこと」

真希「そう(安心する) ……何かこれ、味しない」

英輔「賞味期限切れてるもん」

真希「大丈夫でしょ、ちよつとぐらい」

英輔「まあ、俺も食ったしね」

英輔と真希、見つめ合う。

真希「起きちゃったから、寝られない」

英輔「そっか……」

英輔、真希にキスをする。

英輔「……味するじゃん」

真希「ん?」

英輔「苺の味……」

真希「ほんと?」

英輔「うん……ちゃんと、するよ。まだ」

英輔、真希の身体を引き寄せ、味を確かめるように再びキスをする――。

(終)